新　刊

□北方山草会：**北方山草第20号（特集）** 226 pp. 2003. ¥3,000＋送料¥340. 同会.

北方山草会は，札幌に本拠を置いた，自然保護を肝に銘じて，山野草の研究と培養・繁殖に取り組む人たちの同好会である．同会は1980（昭和55）年に故阿保精一氏の尽力によって発足し，これまでに故原　秀雄氏，故豊国秀夫氏らが会の運営に携わってこられた．「自然保護を肝に銘じて」とは同会の会則にあることばであるが，一本筋が通ったこの会のポリシーは，本号のほか，バックナンバーのいくつかの論文にみてとることができる．

さて，北方山草第20号は，最近20年の北海道における植物研究をまとめている．特集1は，北海道の野生植物に関する論考集であり，小宮定志氏の「北海道における食虫植物の現状と新産種」，野坂志朗氏の「超ニッケル集積植物タカネグンバイ」，堀江健二氏の「北海道・低山域の超塩基性岩地に分布する高山性植物」，松井　洋氏の「北海道のマメ科ゲンゲ属植物の分布」，五十嵐　博氏の「1980年以降に北海道で新たに確認された植物・新産地の報告」など16篇の報文があり，筆者も一文を寄せさせていただいた．

五十嵐氏の上記の報告から，刻々と明らかになっていく北海道のフロラ研究の現状を垣間見ることができる．筆者の乏しい道内での調査の経験からも，まだまだ未知の植物が見いだされる可能性が高いといえるだろう．北海道は広く，そして研究者の人口密度は決して高くはない．しかし，それだけが問題点ではなかろう．植物を見つめる鋭い眼が必要なのだろう．冒頭にある，梅沢　俊氏の一見奇抜なタイトルの報文，「新種の見つけられ方」にその辺りの事情がみてとれるように思われる．

特集2は山野草と栽培を中心にして，丹征昭氏の「山草園芸：過去から未来へ」，吉野博吉氏の「その後のロックガーデンの花たち」，辻井達一氏の「シャーロックホームズと山草」など11篇が収められている．とくに，三橋　俊治氏の「山野草栽培と自然保護」には山野草を培養する立場から，今様の自然保護に対して鋭い視点で疑問が投げかけられて，一読に値する．

本書は北海道のフロラ研究の一里塚である．北方のフロラに関心をお持ちの方にお勧めしたい．バックナンバーには，土地柄もあり，サハリンや東シベリアの植物に関する報文もしばしば取り上げられている．本号とバックナンバーの入手については，同会事務局の，011-0013 札幌市北区北13条西3丁目13 北13条ビル2F ムーヴ植物設計内 五十嵐　博氏 Tel 011–709–0300 Fax 011–709–0313に照会していただきたい． （門田裕一）

□吉田集而，掘田　満，印東道子（編）：**イモとヒト** 356 pp. 2003. ¥5,500. 平凡社.

澱粉を蓄積して地下部に蓄えて肥大した芋を利用する，千種近い植物のリストが収録されてるが，そのなかで，多く利用されているサトイモ，ヤマノイモ，クワズイモ，キャッサバ，サツマイモ，コンニャクなどの品種，栽培法，利用法が詳細に記述されている．芋を食用に利用することは，ヒトが生きる手段として古くから行われていたと思われるが，野生から栽培えの転化はよくわかっていない．しかし，現地での芋の呼び名の変化，ＤＮＡ，アイソザイムの調査などから，芋の起源と系統関係を明らかにしようと努力している．

考古学，文化人類学，言語学，遺伝学などの，色々な分野の研究者の協力のもとに記述され，多数の文献が収録されている．根栽植物の他にハトムギ，タイヘイヨウグルミ，ココヤシ，バナナなども取り上げられている．根栽農業を総合的に纏めた意欲的な著書である．これが横文字で書かれたら，世界的な文献になるであろう． （山崎　敬）

□薄葉　重：**虫こぶハンドブック** 82 pp. 2003. ¥1,200. 文一総合出版.

野外へ出れば虫こぶや菌こぶに出会うことは珍しくない．標本にするときにはそういうものは避けてしまうが，観察対象としては逃げられない．でもほとんどの場合「虫こぶ」とか「菌こぶ」で済ませてしまう．これ迄に記録された虫こぶは約1,400種あり，まだ多数が未記録であるという．本書はその中から

126種類のカラー写真に，簡単な説明が付けられている．

虫こぶと言っても，その形成生物はハチ，ハエ，ガ，アブラムシ，ダニ，キジラミと多様で，それぞれ独特の虫こぶを作る．写真は寄主植物の分類順（牧野新日本植物図鑑準拠）に並べられており，サイズはＢ６版と手頃なので，われわれ植物屋にとって使い易い．植物をやる側がこういうものの知識を持てば，虫屋さんとは違う発見があるのではないかと思う．たとえばヤドリギの種類と寄主との関係のように…．あるいは形態形成刺激物質の探究とか…．虫こぶ命名の原則は「植物名＋形成部位＋形＋フシ」だそうで，たとえばブナハマルタマフシの形成者はブナマルタマバエである．虫こぶで名高いイスノキでは，５種類もの異なった虫こぶが示されている．同じ著者の「虫こぶ入門」（八坂書房）は，本誌71巻235頁に紹介した．　（金井弘夫）

□森　和男：**誰がスーリエを殺したか１．** みねはな (50)：122–203．2003.

みねはな会は関西を本拠とする山草同好会で，このたび創刊50年記念号（273頁）が刊行された．多くの記念投稿の中から，東亜植物に関係の深いプラントハンター J.A. Soulié についての表記の一文を紹介する．森氏は丹念な文献探索に加えて，度々の現地調査を行った結果を，彼独特の筆致で記述している．長い前置きの中では，文中に登場する29名もの人物（日本人では雲南奥地で殺害されたと言われる能海　寛を含む）の簡潔な紹介，関係地名，政治情勢，当時の報道など，たくさんの情報が記述され，これだけでも当時の情勢，とくに西欧列強の進出に伴う現地の動きがわかる．

文末に四川・雲南・チベット辺境地区年譜（1624–1914年），利用した文献一覧がある．欧米関係文献の原典は少なく，それらの訳本はかなりたくさん参照しているが，むしろ中国内の文献を多量に利用し，日本国内の出版物を併せて用いている点，自分らの都合のよいように記録された欧米出版物からの翻訳による偏向を排除しようという，著者の気の入れ方が一通りではないことをうかがわせる．まだ続きがあるはずなので，期待したい．みねはな会の会誌関係連絡先は616-[redacted]京都市右京区[redacted]内藤登喜夫氏へ．一部2,500円（送料は別）とのことである．なお本号には里見信生氏，久保田秀夫氏の追悼文，１–50号の著者別総目録（約1600件）も含まれている．　（金井弘夫）